活動報告

県立併設型中高一貫教育校としての新たな学校づくりへの挑戦（Ⅰ）

―県立中学校開校に向けた取組と新たな学校づくりの基本的な考え方―

真　部　健　一

A Challenge to Creating a Prefectural Joint-Type Lower and Upper Secondary School（Ⅰ): Practical Tackling for the Foundation of a Prefectural Junior High School and a Basic Way of Thinking toward Creating a Joint-Type Lower and Upper Secondary School

Ken'ichi MANABE

【要　　旨】

中高一貫教育は1999(平成11)年４月に制度化され、中等教育の一層の多様化を推進し、生徒一人ひとりの個性を重視した教育の実現を目指して、選択的導入が可能となった。国の大きな教育改革の動きに呼応して、大分県でも教育改革が進められ、2007（平成19）年４月から大分豊府高等学校に併設型中高一貫教育が導入されることになった。2006（平成18）年４月に校長として着任し、１年間という限られた時間のなか、新設の県立中学校の体制づくりや生徒募集・入学者選抜検査等に取り組むとともに、中高一貫教育校としての新たな学校づくりに向けて、“Challenge and Step Up with Passion！”を合い言葉に挑戦を始めた。大分豊府高等学校設立の理念を原点として学校教育目標を定め、その実現に向けて４つの「教育課題」を、また、その「教育課題」への取組を活性化させ、教育活動のレベルアップを図るために、３つの「学校経営課題」を設定した。なお、学校づくりの基本となる中高一貫教育の利点、課題等についても整理してみた。

Ⅰ．はじめに

国段階で第３の教育改革と言われるほどの大きな改革が進行するなか、大分県においてもその流れに呼応して一連の教育改革が行われ、2005（平成17）年３月の「高校改革推進計画*1」により、大分豊府高等学校に併設型中高一貫教育を導入し、2007（平成19）年４月１日に開校することが発表された。

2006（平成18）年４月に大分豊府高等学校に校長として着任したが、１年後に迫った県内の公立で初めての併設型中高一貫教育校の開校に向けて、早急な取組が求められていた。中学棟

や新体育館、モダンな駐輪場等の建築が着々と進行するなか、中高一貫教育校としての新たな学校づくり、特に新設される県立中学校の開校を目指して、学校教育目標、教育方針、教育課程、特別活動、制服、校則、設置部活動等、学校として教育活動を行う上での基盤となるありとあらゆる事項について具体的に定めるとともに、小学生やその保護者等を対象とする学校説明会の準備等にも積極的な取組を行った。

2007（平成19）年４月１日に大分豊府中学校が開校し、４月11日に開校式及び第１回入学式を挙行した。中高一貫教育という新たな制度のもと、新入生たちが志の高い目標を抱き、その実現を目指して挑戦を始めることができるのは、大分県教育委員会の指導のもと、開校準備室のスタッフを中心とした中高全教職員の精力的かつ綿密な取組によるものであった。

大分豊府中学校・高等学校では、６年間にわたる中高一貫した教育を計画的・重点的に行うために、「基礎期（中１～中２）」、「充実期（中３～高１）」、「発展期（高２～高３）」の３つの期間に分けている。私の大分豊府中・高等学校とのかかわりは、中学校開校前の準備段階の１年間と、１期生の「基礎期」にあたる入学後の２年間、いわゆる、中高一貫教育の土台づくりの３年間であった。

併設型中高一貫教育校としての学校づくりは、本県の公立として初めての試みであり、苦労も多かったが、やりがいのある「挑戦」でもあった。学校づくりはまだ始まったばかりであり、これからも「挑戦」が続くわけであるが、在職した３年間を振り返り、中高一貫教育校としての大分豊府中学校の基礎づくりに係る実践的な取組の経緯や学校づくりに対する考え方、特色ある教育活動の内容等について整理し、その概要をまとめてみた。

なお、紙面の都合上、２回に分けて執筆することとし、本稿では県立中学校開校までの中学生受け入れに向けての体制づくり・生徒募集・入学者選抜検査等への取組や、大分豊府高校の歴史と特色、大分県の高校教育を取り巻く状況に簡潔に触れながら、中高一貫教育校としての学校づくりの基本的な視点や学校教育目標や方針、目標達成のための課題の設定等について扱うこととする。

次稿では、大分豊府中学校の特色ある教育課程編成や教育活動等について、具体的に示すとともに、これまでの成果と課題についてまとめ、生徒の変容を探る。

Ⅱ．併設型中高一貫教育校開校に向けての取組

１．開校１年前までの取組の状況

（１）学校における取組

2005（平成17）年３月29日に公表された「高校改革推進計画」で、大分豊府高校に併設型中高一貫教育への導入が決定されたが、それが案として示されたのは、2005（平成17）年１月の「高校改革推進計画（素案）」においてであった。

2007（平成19）年４月開校という極めて限られた時間の中で、中学生の受け入れに伴う新しい中学棟や体育館等の新設、様々な施設の改修・整備などのハード面はいうまでもなく、６年間にわたる中高一貫教育のビジョンやそのビジョンの実現をめざす諸々の教育活動を行うための体制づくりに向け、早急な取組が求められていた。

2006（平成18）年４月に校長として着任したときには、施設・設備等のハード面は着々と進行していたが、学校経営方針やビジョンの作成、教育課程の編成や部活動の編成方針に関することなどのソフト面については、構想案が作成されてはいたが、中学校関係者の意見も反映されておらず、一層の検討を要するものであった。

（２）「県立中学校の入学者選抜の概要」の公表

大分豊府高校への併設型中高一貫教育導入の決定を受け、2006（平成18）年２月に大分県教育委員会から「県立中学校の入学者選抜の概要」が公表され、入学定員、出願資格、通学区域、選抜方法、選抜日程等の概要が示された。

２．県立中学校開校準備室の設置と開校に至るまでの取組

（１）「県立中学校開校準備室」の設置

開校１年前の2006（平成18）年４月１日に、「県立中学校開校準備室」が大分豊府高等学校内に校務分掌として設置され、専従職員４名が配置された。専従職員は、中学校関係者２名、高等学校関係者１名、事務職員１名で構成され、県内初の中高一貫教育校としての県立中学校の開校に向けて、教育内容や方法、学校行事や部活動、制服や給食等あらゆる教育活動や学校生活に係る事項の原案づくりに、大分県教育委員会や大分豊府高校と密接な連携を取りながら、精力的に取り組んだ。

開校準備に係る校内の業務体制については、2006（平成18）年８月１日に大分豊府中学校が正式に開設され前と後では、異なるものであった。７月31日までの組織の主な流れは、校長の指示を高校の教頭が受け、教頭と開校準備に携わるスタッフとで連絡調整を行いながら、原案作成等を進めていった。

８月１日以降は、開校準備室と高校の教頭を中心とする組織とが並列に並び、準備室は県立中学の開校に向け様々な事項について原案づくりを行うとともに、高校との連携が必要な業務については高校の教頭等と連絡調整を行うなど、きめ細かく業務を進めた。

一方、豊府高校の教頭は準備室との連携のもと、県立中学校の開校に向けた高校教職員の業務分担や業務内容、業務日程等についての連絡調整、６年間の中高一貫教育における高等学校の教育課程やクラス編成、進路指導の在り方等についての原案作成に関して、校長の指示のもと、積極的に指導導助言を行った。

（２）校内におけるプロジェクトチーム「中高一貫教育推進委員会」の設置

開校までの期間もあまりない状況のなかで、早急な結論を必要とする課題の解決を目指すとともに、準備室と高校の連携を深め業務の円滑な運営を図るため、「中高一貫教育推進委員会」というプロジェクトチームを立ち上げ、定期的に会議を行った。中学校開校に向けての情報交換や各教科・各分掌における中・高間の業務の連携、教育課程や校時、制服、校章、教科における中高連携の在り方等さまざまな具体的事項について検討を行い、職員会議に提出する資料作成等を行った。

中・高それぞれの教育内容や方法等に関する考え方の違い、中高一貫教育導入に伴い見直しが求められる高校の教育活動や教育環境の変化への戸惑いなどから、共通理解に至るまでにはかなりの議論・時間を要した事項もあったが、緻密でスピーディな計画立案の作成を目指し、意欲的に取り組む開校準備室のスタッフの熱意、教科指導や進路指導、生徒指導、部活指導等多忙な高校の業務を行いながら、積極的に準備にかかわった高校教職員の協力のおかげで、開校に向けての準備は着々と進行した。

（３）県立中学校（中高一貫教育校）学校説明会の開催

同年６月11日の日曜日に、大分県教育委員会主催の「県立中学校（中高一貫教育校）学校説明会」を小学生及びその保護者、教育関係者、関心のある一般県民を対象にして、大分市内の九州石油ドーム（現大分銀行ドーム）で開催した。

この説明会には大分市内を中心に県内外から約3000人が集まり、県内では過去最大規模の学校説明会となった。併設型中高一貫教育の基本的考え方や新設中学の学校概要、県立中学校入学者選抜の概要等についての説明が大型ビジョンを使って行われた。説明に対する質問も多く出され、中高一貫教育に対する興味・関心の高さを肌で感じ取ることのできた効果的かつ印象的な説明会であった。

この説明会の司会は大分豊府高校18期卒業の大学生がボランティアで担当してくれたし、豊府高校吹奏楽部の生徒たちが校歌等の演奏を行ったり、生徒会の生徒たちが会場整備や誘導に積極的に協力してくれたりするなど、学校として一体となった取組を行い、中高一貫教育のスタートに向け盛り上がりのある行事となった。

（４）大分県立中学校入学者選抜実施要項の公表

７月21日に平成19年度の「大分県立中学校入学者選抜実施要項」が公表され、８月に入学者選抜地区別説明会が小学校の管理職等を対象に県内７カ所で開催された。

（５）大分県立大分豊府中学校の開設

2006（平成18）年８月１日に大分県立大分豊府中学校が開設され、初代校長には真部健一大分豊府高等学校長が兼務として、また、副校長に小池一彦、教頭に木津博文、事務長（兼務）に橋爪敬史が発令された。

（６）「大分豊府中学校入学者募集要項」の発表

同年10月に「平成19年度大分豊府中学校入学者募集要項」が大分県教育委員から発表された。そして「大分豊府中学校募集要項等説明会」を10月９日（祝）午後（大分文化会館）、10月15日（日）午前（大分文化会館）、同日午後（生涯教育センター）の３回にわたって、小学６年生の保護者、小学６年生、その他関心のある人々を対象として実施した。トータルで約1500人の参加者があり、真剣に説明に聞き入る小学生や保護者の熱い眼差しが印象的であった。

（７）大分豊府中学校第１回入学者選抜検査

県内公立の併設型中高一貫教育校における初の中学校入学者選抜の実施ということで、県民の関心も極めて高く、大分豊府中・高の教職員にとってそのプレッシャーは筆舌に尽くし難いものであった。①「多くの小学生がチャレンジしてくれるだろうか」、②「100％ミスのない選抜業務の実施」、③「選抜実施期間の万全な危機管理体制の構築」等々の思いや課題を胸に、１月13日という年明けの早い時期に初めての中学校入学者選抜検査に臨んだ。受検生が小学生であるため、一層の緊張感を持ち慎重かつていねいな対応を全教職員で確認した。

結果として、上記①については、120人の募集人員に対して805人の小学生が志願し、6.7倍もの高い競争率となった。わずか120人の募集人員ということで、涙を流した受検生が多かったことは残念なことではあるが、これだけ多くの小学生がチャレンジしたことに、子どもたちの持つたくましいエネルギーを強く感じた。

②、③については、いかなる入試においても求められる課題であるが、今回は大分県の公立の中学校としての初の選抜検査であり、805人もの小学生が受検するという事実を考えると、かつてないほどの緊張感を覚えた。中学校教職員にとっては初めての入学者選抜検査でもあることから、高等学校教職員のこれまでの高校入試における経験をもとに、中高一体となった取組が有機的に行えるよう業務内容・分担等を定めた。

適性検査や面接はもちろんのこと、願書の受付・点検、会場設営、検査問題等の管理、採点、成績処理、入学予定者の決定・発表等、一つひとつの業務に細心の注意を払い入念なチェックを行い、初めての選抜検査はミスや混乱もなく無事に終了した。

公正公平な入試を目指して中・高の教職員が入学者選抜業務に一体となって取り組み、無事に終了したことは、その後の中高一貫教育の取組を推進する上でも大きな自信となった。

（８）受検者数・受検倍率

平成19年度から平成22年度までの受検者数及び受検倍率は次の表１のとおりである。

表１．大分豊府中学校入学者選抜検査における受検者数及び受験倍率

年度	受検者数（人）	受検倍率（倍）
平19	805	6.7
平20	506	4.2
平21	480	4.0
平22	408	3.4

（「大分豊府中学校学校要覧」〔2007－2010年度〕により筆者作成）

第１回の選抜検査の受検者数は805人で、受検倍率は6.7倍であった。私学の中高一貫教育が先行するなか、公立で初の併設型中高一貫教育を実施する大分豊中学校にどれほどの数の児童が受検するのか、大きな関心が注がれていた。

九石ドームをはじめとする数回にわたる児童やその保護者等への説明会の開催により、併設型中高一貫教育の特色やその特色を生かした学

校づくりに対する理解や関心・期待が深まったためであろうか、多くの小学生が受検に挑戦し、高い競争率となった。また、検査日を県内の私学の中高一貫教育校や国立大学の附属中学校の入試日と重ならないように設定したことも影響していると判断される。

２年目以降、受検倍率は４～３倍と安定してきている。検査日の他中学との競合もその理由として考えられるが、小学生やその保護者の大分豊府の中高一貫教育に対する理解や学校選択の考え方が、より適切なものとなってきたからであろう。

なお、2004（平成16）年に開校した長崎県の併設型中高一貫教育校の長崎東中学校、佐世保北中学校の平成22年度入学検査の受検倍率を見ても、それぞれ3.9倍、3.1倍とほぼ同じような倍率となっている。

（９）入学者の出身地域

この選抜検査には、保護者の住所が県内にある小学６年生であれば誰でも出願できることになっているが、平成19年度から平成22年度の大分豊府中学校学校要覧により入学当初の在籍生徒の出身市町村別生徒数を調べると、表２のとおり、大分市内の小学校出身者が毎年90％前後の割合を占めている。

このことは、学校が大分市内に位置していること、寮がないこと、下宿等での生活には年齢的に不安な要素もあることなどが、その要因として考えられる。

表２．入学時の大分市内小学校出身者の占める数と割合

年度	生徒数(人)	大分市内の小学校出身者	
		数（人）	割合（%）
平19	120	108	90.0
平20	120	105	87.5
平21	120	108	90.0
平22	120	110	91.7

（「大分豊府中学校学校要覧」〔2007－2010年度〕により筆者作成）

(10) 大分豊府中学校入学予定者説明会

初めての中学校入学者選抜を無事に終了し、2007（平成19）年２月18日（日）に大分豊府中学校入学予定者説明会を、大分豊府高等学校体育館で開催した。「入学のしおり」を用いて、教育概要、学校生活、各種手続き、連絡事項等についての説明や質疑応答を午前10時から約１時間行った。入学予定者及びその保護者ともに緊張した面持ちで、熱心に説明に聞き入っていた。

(11) 大分県立大分豊府中学校施設建築工事竣工式典

４月11日の大分豊府中学校開校・入学式を前に、中学棟や新体育館などの施設建築工事が完成し、2007（平成19）年３月29日（木）の午前10時から、新しい大分豊府中学校体育館で県議会議長や大分市教育長をはじめ、多くの来賓の方々や教育関係者等の参列のもとに竣工式典が盛大に行われた。入学予定の生徒や保護者も参加し、完成したばかりの中学棟や中学校体育館、モダンな２階建ての駐輪場等に目を輝かせ、４月から始まる豊府中学１期生としての学校生活に胸を膨らませていた。

当日は、広瀬大分県知事の揮毫による「大分県立大分豊府中学校」の校名板の除幕が深田教育長と真部校長によって行われ、中学校北側来客用玄関に掲げられた。

(12) 大分豊府中学校開校式及び第１回入学式

2007（平成19）年４月１日に開校した大分豊府中学校は、４月11日に記念すべき大分豊府中学校開校式及び第１回入学式を、新装なる中学校体育館で挙行した。

豊府高等学校生徒会役員の先導で新入生が入場し、午後１時半に小池副校長の開式のことばで開校式が始まった。西太一郎大分県教育委員会教育委員長（当時）が開校を宣言した後、真部校長にスクールカラーのグリーンの生地に大分豊府中学校の校章をのせた校旗を授与し、大分県の公立で初めての併設型中高一貫教育が実質的にスタートした。

開校式に引き続いて、大分豊府中学校第１回入学式が行われ、真部校長が第１期生120人の入学を許可した。校長式辞、来賓祝辞の後、新入生を代表して井上雪子さんが誓いのことばを述べ、会場から盛大な拍手を受けた。式の終了

後、学級担任等の紹介が行われ、新しい担任の誘導により新入生たちはそれぞれのクラスに分かれていった。不安な気持ちを抱きながらも、１期生としての自覚と誇りを持ち頑張っていこうとする気迫を感じさせるすばらしい式であった。

なお、平成20年度からは、大分豊府高校と合同で入学式を行うことになった。

Ⅲ．新しい学校づくりの基盤となる大分豊府高校の特色及び県内高校における学力向上等の取組

１．大分豊府高等学校の歴史と特色

大分豊府高校は1986（昭和61）年４月１日に開校し、2005（平成17）年に創立20周年を迎えたばかりの、県内で最も若い普通科高校である。

「感動・理知・友愛」を校訓とし、普通科進学校として、「先輩・伝統校に追いつけ、追い越せ」を合い言葉に、すばらしい進学や部活動の実績を残してきた。しかし、1995（平成７）年３月から入学者選抜制度が合同選抜から単独選抜に変更されて以来、国公立大学への進学実績は着実に成果をあげているが、いわゆる難関大学への合格者の増が課題となっている。

部活動においては、フェンシング部や野球部、サッカー部、弓道部等はもとより、演劇部や吹奏楽部等の文化部もすばらしい活動を行っている。特にフェンシング部は全国大会で優勝するなど顕著な実績を上げている。

また、地域の美化を目指して、近隣の中学校や高等学校と連携して行う「中高連携奉仕活動」は、地域との結びつきを深める上でも効果的であり、10年間の活動実績が評価され、2006（平成18）年４月27日に県知事表彰を受賞した。

大分豊府高校はわずか20年の若い歴史の学校であるが、新しい試みに絶えず挑戦してきた学校でもある。県内公立高校で初の海外修学旅行（韓国）の実施、65分・２学期制の導入、農業高校での体験学習、前述の中高連携奉仕活動等、教育方針・校訓に基づいた特色ある学校づくりを積極的に行ってきたことが、「伸びゆく学校」と呼ばれる所以である。

２．大分県における高等学校の学力向上、特色ある学校づくりの状況

少子化、高齢化等の社会の変化、生徒の多様化、急激な生徒数の減少等を背景に「高校改革推進計画」が策定・推進されるなか、大分県教育の最重要課題の一つである学力向上、進学力向上への対応とも相俟って、理数科におけるSSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）の取組や進学系総合学科の設置等、特色ある学校づくりを目指す各種施策が積極的に推進されている。

Ⅳ．中高一貫教育校としての新たな学校づくり

１．学校づくりのための基本的考え方

大分豊府高校に校長として着任したのは2006（平成18）年４月１日、大分豊府で併設型中高一貫教育がスタートする１年前であった。限られた時間のなか、併設型中高一貫教育の特色を生かしてどのような生徒を育成するのか、そのためにはどのような学校づくりを行うのか、ビジョンづくりに早急に取りかからなければならなかった。

中高一貫教育校としての大分豊府の新しい学校づくりを行うにあたって、基本的な視点として次の①～③を設定した。

① 大分豊府高校設立の理念を原点とする質の高い、活力あふれる教育活動を推進し、全国に誇れる学校づくりに努める。
② 大分豊府高校に中高一貫教育が導入されたことのねらいや使命の重みを踏まえ、期待に応えられる学校づくりを進める。
③ 中高一貫教育の導入を、活力あふれる、信頼される学校づくりに向けての絶好の機会としてとらえ、積極的な取組を行う。

2．中高一貫教育校としての基盤となる学校教育目標の設定

中高一貫教育の導入と学校教育目標との関係をどのように考えればいいのか。大きな課題であった。基本に戻って考えたことは、「中高一貫教育は教育の一つの制度であって、目標そのものではない。学校教育目標の達成を目指すために、その制度の利点をどのように生かすかということが課題である」ということであった。

自己の教育理念にも照らし、次の①～④の考え方により、大分豊府高校の教育の原点である創立時の学校教育目標立ち帰ることにした。

① 県内初の公立の併設型中高一貫教育を大分豊府高校に導入したことの重みを考えるとともに、この導入を本校のこれまでの特色ある学校づくり、学校の活性化を一層推進するための絶好の機会としてとらえたい。

② 大分豊府高校創立20年が経過した今、原点である創立の理念に立ち返り、「伸びゆく学校」としてのこれまでの学校づくりの実績や成果を土台にして、一層の活性化、特色づくりを推進し、「豊府らしさ」を生かした新たな学校づくりに努めていかなければならない。

③ 「感動・理知・友愛」は、大分豊府の教育の根幹を成す校訓である。その精神を核として、崇高な理想を掲げて中高一貫教育という制度を生かし新たな学校づくりを行うことが、大分豊府に求められている期待である。

④ 環境汚染、地球温暖化等地球規模での課題が山積し、また、社会における人間性や規範意識の欠如・人間関係の希薄化等が叫ばれる今日、「豊かな心を持ち、国際社会でリーダーとしてたくましく生きる、信頼される人間」を育成することは、これからの社会において極めて重要なことであり、教育に課せられた重要な使命である。

【大分豊府中学校・高等学校の学校教育目標】

> 自己の存在感が確かめられる充実した学校生活を通して、未来を志向し、豊かな人間性と創造的な知性と逞しさを備えた国際性に富む人間の育成に努める。

3．教育方針

学校の教育目標、「感動・理知・友愛」の校訓を基本に教育方針を作成したが、作成にあたって次の４つを基本的な視点として設定した。

> ① 潜在的な能力・可能性を引き出し、伸ばし、鍛える教育
> ② 確かな学力の向上と志の高い進路目標の設定
> ③ 幅広い社会性、友愛精神、豊かな人間性の育成
> ④ 心身の調和した逞しさと豊かな感性の育成

「潜在的な能力・可能性を引き出す教育」を教育の基本とし、高い志を有し、創造的な知性、豊かな人間性とたくましさを備えた、知・徳・体のバランスの取れた人間の育成を目指し、併設型中高一貫教育という制度の利点を生かして、６年間を見通した計画的・継続的な教育を行う。

【教育方針】

> 1 生徒一人ひとりのもつ潜在的な能力や可能性を積極的に引き出し、知的探求心を存分に養い、創造的な知性を大きく伸長させる。
> 2 基礎・基本の徹底と確かな学力の向上を図り、志の高い進路目標の設定とその実現に努め、未来社会を生きる力を育てる。
> 3 人権尊重の精神を培うとともに、人間的な心の触れ合いや感動体験活動と生き

生きとした集団づくりを通して、幅広い社会性や友愛の精神と豊かな人間性を養う。
4　文武両道を推進し、魅力ある体育・文化活動を通して、心身の調和した逞しさと豊かな感性を育む。

4．学校スローガンの提唱

次代に生きる子どもたちには無限の可能性が秘められている。高い志を抱き、その実現に向けて、情熱をもってチャレンジできる人間の育成が、教育の大きな目標であると考える。学校説明会で小学生等に配布した大分豊府中学校の学校案内の冊子においても、「曹源一滴水」や「鴻鵠之志」、「意気衝天」のことばを示し、可能性への挑戦を呼びかけた。

学校づくりにおいても同様なことが言える。中高一貫教育の導入を学校活性化への絶好の機会として積極的にとらえ、教育活動の一層の質的向上を図り、生徒・保護者や県民の期待に応える特色ある学校づくりを行うためには、明確なビジョンのもと、意欲的に学校運営や教育活動に取り組むことが必要である。

そのような思いから、“Challenge and Step Up”を学校スローガンとして掲げたが、インパクトが少し弱い感じがした。その翌年2007（平成19)年４月に、もっと強い思い、「情熱」、をもって挑戦してもらいたいという願いをこめて、“Challenge and Step Up with Passion！”を提唱した。生徒や教職員だけでなく、保護者も折に触れてこのスローガンを口にし、生徒の目的意識の明確化、生徒・教職員・保護者が一体となった学校づくりに向けての意識の高揚等の面で、極めて効果的であった。

5．教育目標達成のための「教育課題」と「学校経営」課題の設定

県立初の中高一貫教育校としての使命を自覚し、「国際社会をたくましく生きる人間の育成」を目指して、活力あふれる学校づくりを推進するために、「学力の向上」、「豊かな人間性・社会性・友愛の精神の育成」、「部活動の活性化」という３つの視点と、高等学校教育の主要なねらいである「進路目標の達成」を、本校における４つの「教育課題」として位置づけた。

これらの教育課題への取組を効果的に推進するためには、教育活動の一層のレベルアップを積極的に図る必要がある。そして、学年・教科・分掌の各組織の活性化や教職員の資質の向上とともに、各組織や中・高間の連携の促進を「学校経営課題」として掲げた。そして、全教職員に次の「４つの力」をキーワードとして示し、新たな学校づくりを目指すための教育活動等のレベルアップに向け、意識の活性化・積極的な取組をお願いした。

【新たな学校づくりに求められる４つの力】

「挑戦」＝新たな課題に対して前向きの姿勢で取り組む力
「創造」＝前例踏襲という安易な考え方ではなく、今までにない独自なアイデアを創り出す力
「躍動」＝実行力を持って、力強く生き生きと活動する力
「連携」＝同じ目的をもつ者同士が互いに連絡を取り、「把手共行」の精神で協力し合って物事に取り組む力

6．中高一貫教育に対する理解の促進

中高一貫教育校としての特色ある学校づくりを効果的に行うためには、中高一貫教育導入のねらいや利点、課題、教育課程の基準の特例等について十分理解しておくことが必要である。

（1）中高一貫教育導入のねらいと利点

2000（平成12）年１月の中高一貫教育推進会議報告「中高一貫教育の推進について」のなかで、中高一貫教育導入のねらいについて、「中高一貫教育は、これまでの中学校・高等学校に加えて、生徒や保護者が６年間の一貫教育も選択できるようにすることにより、中等教育の一

層の多様化を推進し、生徒一人一人の個性をより重視した教育の実現を目指すものである」[*2]と述べている。

また、中高一貫教育の利点（意義）について次の９点をあげている[*3]。

① 高等学校入学者選抜の影響を受けずにゆとりある安定的な学校生活が送れること。
② ６年間の計画的・継続的な教育指導が展開でき、効果的な一貫した指導が可能となること。
③ ６年間にわたり生徒を継続的に把握することにより、生徒の個性を伸長したり、優れた才能の発見が一層可能となること。
④ 中学１年生段階から高校３年生段階までの異年齢集団による活動が行えることにより、社会性や豊かな人間性を一層育成できること。
⑤ ６年間を通じて、自己の在り方生き方や将来の進路に関する学習を系統的・計画的に実施することにより、就職や上級学校への進学など生徒の個性に応じた進路指導ができること。
⑥ 中学校段階において、教育課程の基準の特例を活用することなどにより、特色ある教育課程の編成・実施が可能となること。
⑦ 高等学校段階において、中学校段階までの教育を基盤として、総合学科や単位制の活用、特色ある教科・科目の設定等様々な方策を組み合わせることにより、特色ある多様な教育活動が展開できること。
⑧ 中学校の教員と高等学校の教員の交流が促進されることにより、学校の活性化が期待できること。
⑨ 特色ある教育活動の展開や学校運営等の面で、地域の人材の協力を得ることにより、地域社会との連携が密になること。

（２）中高一貫教育の課題

中高一貫教育の課題については、1997（平成９）年６月の中央教育審議会の答申において、以下の５点が指摘されたが、2000（平成12）年１月の中高一貫教育推進会議報告では、このような課題の解決に向けた工夫そのものが、中高一貫教育を行う学校としての特色となるように、前向きな取組を行うことを求めている[*4]。

① 制度の適切な運用が図られない場合には、受験競争の低年齢化につながるおそれがあること。
② （大学）受験準備に偏した教育が行われるおそれがある。
③ 小学校の卒業段階での進路選択は困難なこと。
④ 心身発達の差異の大きい生徒を対象とするため、学校運営に困難が生じる場合があること。
⑤ 生徒集団が長期間同一メンバーで固定されることにより、学習環境になじめない生徒が生じるおそれがあること。

（３）教育課程の基準の特例

中高一貫教育校においては、一般の中学校・高等学校にはない教育課程の基準の特例が設けられており、中高一貫教育のねらいをより一層生かす視点から、この特例を活用した教育課程の編成・実施の工夫が求められている。

【教育課程の基準の特例の一部】

① 各教科や科目の内容のうち、相互に関連するものの一部を入れ替えて指導できる。
② 中学校の内容の一部については、高等学校の指導の内容に移行させて指導できる。
③ 高等学校の内容の一部については、中学校の指導の内容に移行させて指導できる。高等学校において、再度指導しないことができる。

（文部科学省告示第60号一部改正）

Ⅴ．おわりに

大分豊府高校への併設型中高一貫教育導入により、県立の大分豊府中学校が大分豊府高校の校地内にを新設された。中高一貫教育校としての学校づくりの推進とともに、校長として特に力を入れたことは、中学生を迎え入れる高校生たちに、「自己存在感」を与えることであった。

多くの人々が注目をし、期待を寄せる中高一貫教育校としての新たな学校づくりという大きな変革のなかで、６年間の中高一貫教育の教育課程を直接履修することのない高校生たちは、この変革に対して戸惑いや一抹の寂しさを感じたことであろう。

大分豊府高校に入学してきた「思い」を大切にし、大分豊府高校の先輩として、志の高い目標を持ちその実現に向けて能力の更なる向上に励むこと、県立初の併設型中高一貫教育校としての学校づくりにかかわれることを、二度とない貴重な経験の場として積極的にとらえ、中学生とともに学校づくりに熱く燃えることを呼びかけた。“Challenge and Step Up with Passion！”を学校スローガンとして掲げた理由の１つでもあった。

高校生たちはこの期待に応えようと、先生方と一体となって学力向上に、部活動の活性化に一生懸命に取り組んだ。進学実績も年々上昇し、部活動も多くの部がすばらしい活躍を示した。そのような活力のある状況のなかで、高校生たちは中学生を妹や弟のようにあたたかく迎え入れ、一緒に新たな学校づくりに取り組もうという積極的な姿勢を示してくれた。

高校生と中学生、教職員と保護者が、新しい大分豊府の学校づくりに向けて、ともにスクラムを組んで歩み始めた。

【注】

＊１　大分県教育委員会は、高校改革推進プラン検討委員会の報告書（2004）について、更に詳細に審議を重ね、2005（平成17）年３月に「高校改革推進計画」を策定した。

＊２　中高一貫教育推進会議（2000）中高一貫教育推進会議報告『中高一貫教育の推進について～500校の設置に向けて～』p. 1

＊３　同上　pp. 1－２

＊４　同上　p. 15

【参考文献】

・大分県学校教育審議会（1993）『生徒減少期に対応する高等学校教育の在り方について（答申）』

・大分県教育委員会（2005、１月）『高校改革推進計画（素案）～特色・魅力・活力ある学校づくりに向けて～』

・大分県教育委員会（2005、３月）『高校改革推進計画～特色・魅力・活力ある学校づくりに向けて～』

・大分県教育委員会（2006）『新大分県総合教育計画（副題；大分県教育改革プラン）平成18～27年度』

・大分県高等学校改革プラン検討委員会（2004）高等学校改革プラン検討委員会報告書『今後の県立高等学校の在り方について～特色・魅力・活力ある学校づくりに向けて～』

・大分県公立高等学校適正配置等懇話会（1999）大分県公立高等学校適正配置等懇話会報告書『大分県立高等学校の学校規模の適正化及び学校・学科の適正配置等の在り方について』

・大分県立大分豊府高等学校（2007）『研究紀要第21号』

・大分県立大分豊府高等学校（2006）『平成18年度学校要覧』

・大分県立大分豊府中学校・大分豊府高等学校（2007－2010）『学校要覧』（平成19年度～22年度）

・大分県立大分豊府中学校（2006～2008、2011）『学校案内』

・工藤文三（2005年２月号）「中高一貫教育の可能性」『中等教育資料』文部科学省

・月刊高校教育編集部編（2006、１月増刊号）『高校改革がわかる本－その歴史とこれからの展望』

・清水一彦監修、藤田晃之＋高校教育研究会　（2008年７月増刊）「講座　日本の高校教育」『月刊高校教育』学事出版

・中央教育審議会（1971）『今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について（答申）』

・中央教育審議会（1997）第16期中央教育審議会答申『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第２次答申）』

・中高一貫教育推進会議（2000）中高一貫教育推進会議報告『中高一貫教育の推進について～500校の設置に向けて～』

・菱村幸彦（2002年５月号）「高校教育改革の系譜」『月刊高校教育』学事出版
・文部省大臣官房編集（1987、８月臨時増刊号　第1327号）「臨教審答申総集編」『文部時報』ぎょうせい